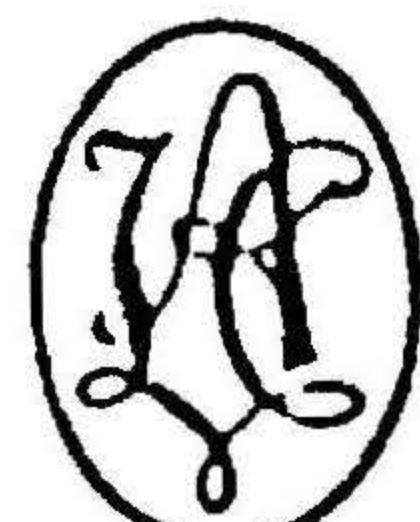




月山・姥ヶ岳で談笑する両氏

やま



J・A・C

第 3 号

平成 年 月

日本山岳会山形支部

事務局長 梅 澤 博

事務局：山形市青町1の13
城北女子高 菊地俊彦 気付

追悼号

二人の大先輩

村上勝太郎

平成2年秋、私達は後藤幹次・斎藤清吉の二人の最古会員を喪った。昭和24年東京の勤務先から鶴岡へ帰る時、山岳会の事務所に挨拶に行き、事務局をやって居た原全教師に山形なら後藤幹次と言う古い会員がいるから機会を見て訪ねたら、と言われたのが後藤さんの名前を知った初めである。

その年の初秋、鶴岡スキー連盟代表をやっていた斎藤貞治氏から富士山で国民体育大会があるので経歴を出すように言われ、斎藤清吉・工藤弘氏と共に選手として出場することになり、大宮に清吉氏を訪ねた。ちょうど秋の取り入れの最中だったらしくかなり待っていて、話した記憶がある。これが幹ちゃん並びに清吉っあんとの出初めである。

富士の国体は本当に戦後間もなくであり、勿論食糧難、東京では戦災復興のバラックがやうやう建ち始めたころで、全国から山へ登ろう何て言う酔狂なのがいるのだろうかと思っていた時代である。新設の秩父宮ラグビー場で開会式の後、富士吉田に着く。ここまでは後藤（幹次・恵治）豊島、田中（邦太郎）の皆さんと一緒にだったと思う。山中では海野治良・梶本徳次郎氏のパーティーで新雪の富士を楽しんで下山した。下山の途中解散後上高地に行こうと言う話し合いになり湯村温泉で後藤さんから旅費を借りたのか貰ったのか三人で島々へ。奈川渡止まりのバスを九州の加藤数功・月原俊二氏等と共に運転手を口説き落として上高地までチャーター、徳沢から大滝山へ。山頂近くのはい松帯では新雪の下を踏み外すと、腰まで入り悪戦苦闘。頂上着午後四時頃、豊科駅に着いたのは朝の三時、駅の当直室に泊めて貰い清吉ちゃんは直江津経由で酒田へ。工藤君と私は東京経由で帰った。

翌25年5月 藤島俊男・渡辺公平・村井米子・藤井運平・原全教の諸氏を招きJAC山形支部が月山山頂で結成式を挙げ、支部として発足したのだが、その時トラックの上から八久和川と梵字川との出合を遠望したのが夏の八久和川溯行の引き金になった。

鈴鹿・大山の国体には監督・視察員で参加させて貰い、宮城・福島と三県共催の第七回の鳥海国体が開かれることになるのだが、岳連の組織は各県共まだ結成されておらず、その連絡には後藤さんの戦前からの人脈によって連絡がとれ初冬の鳥海国体の成功に結び付いたものだと思う。蔵王での東京支部と山形支部・県岳連との合同合宿・講習会が長い間開催され、その都度 林和夫・加藤喜一郎・千谷壮之助・植村直己・日下田実等その時その時の時の人を呼ばれて、楽しい実りある会合に出来たのも後藤さんの力だったと思う。またそれらの会合に清吉ちゃんは殆ど参加されたが庄内弁で話すので話の内容が分からず私が内容を話したことも少なくない。鳥海国体に河原宿から御浜までの千丈ヶ原連絡道の復元、その後の鶴間池からの清吉新道の開設・正月登頂・高体連の指導等清吉ちゃんの鳥海に対するひたむきな思いを思うとき、県山岳界の発展は後藤・斎藤の両先輩無くしては考えら

れない。

私自身立教大学山岳部のナンダコット遠征を戦前の黄金時代とすれば、ナイロン遠征隊といわれるフランス・アンナプルナ隊を嚆矢とするヒマラヤ遠征時代との として、J A C 山形支部発足当時・県岳連のことを何等かの形で残すことも私の責任でもあり、また、後藤・斎藤両先輩の供養になるのではと思い追悼文らしからぬ思い出を書いて御冥福を祈りたい。



両氏に寄せる

石 井 貞 吉

後藤幹次氏県岳連会長時代いろいろの場所でお会いいたしました。特に思い出の深かったのは27年第七回国体鳥海山においでのととき滝の小屋に榎会長さんと一緒においでになったとき、47年鹿児島国体の山岳を屋久島で行われたとき会長に同行して屋久島の山々を歩き、帰りは舟で飲みながら鹿児島へ帰り思い出が深いのです。また鶴岡山岳会創立50記念式典を金峰山中の宮で行ったときおいで下さった事等…。

斎藤清吉氏とは県岳連の山行、高校山岳部の山行等何回となく一緒に参加し山小屋での尺八を聞いたのは特に印象深いのです。

後藤幹次、斎藤清吉氏のご逝去を悼む

水 沢 富 一 郎

昨年十二月、わが支部では二人の会員が逝去された。後藤幹次、斎藤清吉さんの、お二方である。

両氏とも、JAC山形支部が創設される前からの数少ない会員であり、高齢とは言いながら山形県の登山界にとって、掛け替えのない方々だった。昭和二十三年頃、私は当時奉職していた、山形工業高校の先輩である後藤恵治さんの紹介で山形山岳会に入会した。

その頃も両氏は、山形山岳々会長、酒田山岳会幹部として、夫々活躍されていたが、更に両氏等は登山団体の交流発展と、登山者の育成を図るために、JAC山形支部、山形県山岳連盟結成等の組織作りに尽力されて、後藤幹次さんは初代支部長、初代連盟会長、斎藤清吉さんは幹部として、山形県登山界の、結束と向上発展に大きく貢献された。

昭和二十七年秋、第七回国体登山部門が鳥海山一帯を会場として開催されたが、無事に成功修了することが出来たのは、お二人の力によるものが非常に大である。

特に、登山者の技術向上と育成には力を注がれ、JAC本部から講師を招聘し、自らも講師となり、高校生、一般を対象とした冬山登山講習会を数年にわたり開催して、遭難事故防止と、近代登山の新風を吹き込まれた事は山形県の登山界にとって、意義深い事であった。

後藤さんは旅がお好きな方で、晩年も、よく旅行をなさっておられた様だが、私も、お誘いをうけて、加藤、梅津さんと車で、奥只見から奥志賀スーパー林道を志賀高原へ抜け草津、四万温泉への旅に同行させていただいた事があったが、スケッチブックを片手に、先頭になって、ご案内下さった姿が、今も目の当りおもいだされる。

蕎麦もお好きで、ときどき御馳走になったことを覚えている。

秋山郷の木地屋で蕎麦づくりの蘊蓄をかたむけられた、梅津さんの話しにつられ、一つづつ買って帰った捏ね鉢が、まだ使われないうまま棚の上で待っている。

あの志賀高原のホテルで、「今日は八十才の俺の誕生日だから」と、お祝いすべき我々が、逆に大変御馳走になったことは忘れない。

四、五年前の秋、鳥海山に建っている、斎藤さん達の山小舎に招かれ、加藤、梅津さんと訪ねた。

その夜は、一升瓶をたて、とれたての鳥賊の刺身を肴に、四人で夜遅くまで語りあった。

斎藤さんは、酒がお好きで、飲むほどに、酔うほどに、彼の吹く尺八の音は冴え、語る冬の鳥海は、彼らなではの迫力があつた。

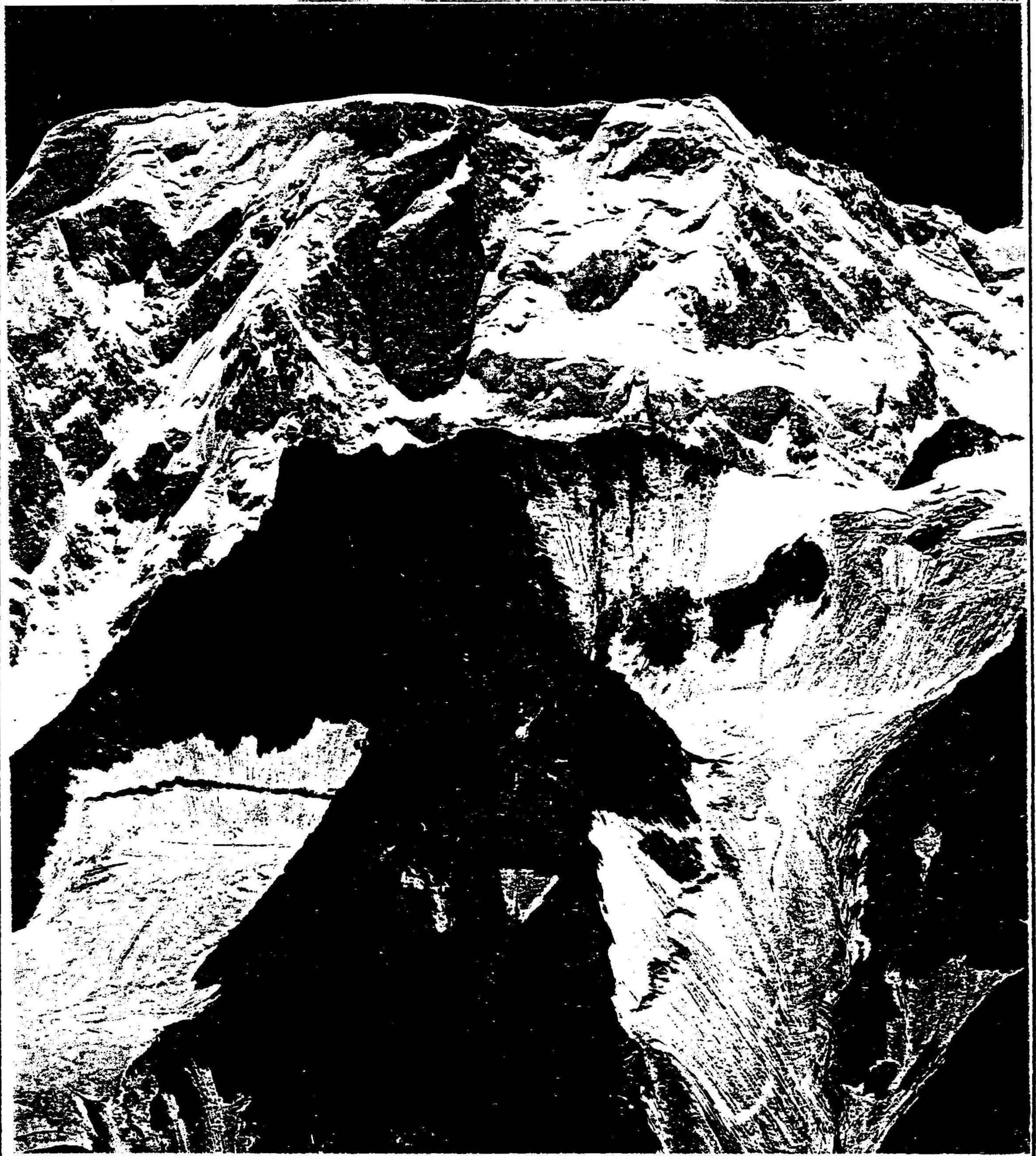
翌日快晴、河原宿まで登って下山した。「今年はお、台風の通り道にならなかったから紅葉は綺麗だよ」と言われたとおり、全山燃えるような

美しい紅葉であった。帰りに寄った滝の小舎のおやじさんの話しでは、この小舎も古くなり、来年は建て替えられるという。その頃の話である。

『山男のひとりごと』署名入りで戴いた斎藤清吉さんの著書である。大正、昭和を鳥海山と共に生きぬいた岳人の、すばらしい記録である。今は形見となってしまった。

大切な先輩方を次々に失うことは耐え切れない程残念で悲しいことである。

1991-3-19



サケ・サケ

加藤達男

『サケ・サケ』『サケ・シャケ』『酒・鮭』、山の大先輩である後藤幹次さん、愛称『幹ちゃん』多くの山仲間や、ほかの方々からも親しみの声で呼ばれ、山で結ばれ、酒でお付き合いが広く、私達の知らない所に行ってもいつも『幹ちゃん』と声がかかり実に親しみある愛称が後藤さんの人柄であったと思います。

後藤さんのトレードマークは笑顔とチロリアン型靴であったと思います。どこに行くにも、チロリアン型靴を履き、お顔は笑顔で、お地蔵様である、話しをして居ても常に笑顔のため周りに『なごやかさ』があったようでした。山仲間の集まりであるJAC東北集会、その他種々の集会などには必ず出席され、元気な姿で東北の大先輩はいつも上座に、いつもの笑顔で『ひとこと』の挨拶で会の空気が和やかになるのも後藤さんの人徳であったようでした。乾杯の音頭をとる時は満面笑顔で高らかにするので、一段とまた酒の味がうまくなったようでした。酒類は日本酒だけ、ビール、ウイスキーその他は駄目であった。戦後の配給時代に濁酒のあじを知ったようで、時々濁酒の事で思い出す事があったのでしょう、配給時代の正月の蔵王スキー合宿のとき清酒が足りなく『濁酒』をどこからか持ってきて飲むうまさ、また、月山春スキーの時、途中の部落での濁酒の味、皆、過ぎ去った楽しい思い出である。

山の仲間の宴会でも、二次会、三次会と、老若男女を問わず、楽しく山を語り、酒を論じて杯を飲み交わすのが『幹ちゃん』であった。夜遅くまで飲んでも翌朝は人より早くオハヨーの一声を笑顔で仲間にするのも『幹ちゃん』である。朝食はいつも持参のパン・チーズ等で軽く終わり、実に上手に酒を自分ペースで飲まれていた。後藤さんの酒は長生きの薬であったかも……。

長い人生を上手に酒で終わったようである。

『シャケ』『鮭』は好物の一つであったと思います。各地の銘酒を各地名産の肴で味わっておったので、本当は『美食家』でなかったかと思ひます。各地の料理の味を知り、地元では庄内の『口細カレイ』また富山の『黒造り塩から』等、実に各地の名産等を語り、旅の土産は海産物等が主であったようです。『鮭』でいつも言葉に出るのが、新潟県村上の三面川河口である日本海の鮭は殊の外好きだったらしい。時々話題になったものです。

確か三年前の春、桜の季節であった、私の庭に深山桜、平清水の平泉寺にある山形市指定天然記念物の『しだれさくら』の子で、17年を経た桜です。この年は特に花のつきが良かった春でした。後藤さんと北海道産銀紅鮭の粕漬を肴に花見をし、酒の終わるころ、珍しくご飯が食べたいと言って残りの鮭でうまそうに食事をしましたが、本当に楽しく一日を過ごした思い出がありました。

その後も桜の頃になると、あの時の『おいしかった!』という言葉が懐かしい思い出となって蘇ってきます。今頃は黄泉の世界で清吉さんと『旦那』『清吉』と言い交わし、二人で山桜の花見をしながら下界の山仲間の話をしている事を偲び、心からご冥福をお祈りします。

特別寄稿

(日本経済新聞社許可済)

日本経済新聞 1991年(平成3年)3月13日(水曜日)

遊抄

日常、街角ですれ違った見知らぬ者同士があいさつを交わすというところは数多にない。しかし、山登りでは自然にあいさつがでる。

「よき友は人生の財産」といふが、四十の手習いで始めた山登りは、私の交友関係にひときわ厚みと幅をもたせた。

元商工中金審査役の小澤丘平氏、彼の語る「深田久弥の世界」に魅せられて、久弥クラブに入り、日本長期信用銀行取締役の中島寛氏からは、自ら体験したヒマラヤのすばらしさを聞き、私の登山熱はいやがうえにも高まった。

この二人の紹介で、さらに多くのアルピニストの方々と知り合うことになった。白馬岳に海海(つがみ)新道を開いた青森町議会議員の小野建氏は、同窓という共通点もあって北アルプスに登るときは、同行を願っている。彼はたいへんな百名山登りの通達で私の交友関係はさらに厚みが増すことであつた。(ままた、なほみり前学友のつがみ)。

アルピニスト

前田 直己

今年の夏は「五十峰登頂」とあった。私は十六歳であり、今のところ先を越された形になっているが、首都東京と東北の片田舎に住むという交通の利便性の違いがこの差であつて自分なりに運命づけられている。

「二十歳をして」といふ周囲の声もあるが、仕事を離れて、私的な目標を持って生きることも人生では大切なことだと思つてゐる。

月山(つきの)のまに始まり、至仏山(しふの)のまに終りを願っている。彼はたいへんな百名山登りの通達で私の交友関係はさらに厚みが増すことであつた。(ままた、なほみり前学友のつがみ)。

田嶋善社(前)



出会い（斎藤清吉翁）

加藤達男

昭和12年頃です

私の向かいが酒田の玉屋運動具店主・加藤さんの実家でした。たまたま、正月に山形に帰宅したとき『どう 冬の鳥海山にこねが』と誘われたので、確か、二月末か三月始め頃と思います、早速汽車で酒田の玉屋運動具店を訪れました。そこで初めて、斎藤清吉・渡部喜助両氏にお会いしました。これが昨年末に亡くなられるまで50数年間に互るお付き合いでした。初対面の斎藤さん、渡部さんは、同じ年頃で、共に若く純朴で『山一筋』という感じでした。

斎藤清吉さんは農家の長男という『おっとりがた』で渡部さんは、たしか、家業が大きい『古物商』とかで何事につけ、物事を積極的に進める方で、常に清吉さんをリードして居つたようです、その頃のわたしは本格的な冬山は初めてであった。スキーに『アザラシ』を着け翌朝、いよいよ冬の鳥海に挑戦、六、七合目頃でスキーをデポし、アイゼンを着けるのは、初めての体験であった、一步一步、頂上を目指したが、あいにくの天候悪化で、残念ながら頂上目前にして引き返した思い出があります。厳冬の山に『アイゼン』『ピッケル』の山行きは最高の気分でもあったが、それ以上に冬山の魅力に感動したものでした。その後も、何回か清吉翁と渡部喜助さん両氏共に、お供して冬山の恐ろしさと醍醐味を味わうことができたことは、長い人生での何よりの幸せでした。何年か後、喜助さんは交通事故で若くして亡くなられたが、本当に惜しまれる岳人であったと思います。

あの頃の両氏は山行での素晴らしい『こんび』で、懐かしい思い出と共に、当時の面影を『偲び』ながらご冥福をお祈りします。

故斎藤清吉さんを偲んで

阿部勇作

若いころから自然に親しみこよなく山に登ることに生きがいを求めてきた先輩の斎藤清吉さんは病院に入院されてからも山の話をよくされているようでした。

木枯らしの吹く12月19日に友人のOさんから訃報の連絡を受けたときは悲しみが先に立ち深く哀悼の念にかられると共に、在りし日の先輩と苦楽を共にして歩いてきた数多い山行きのことが追慕されてなりませんでした。

私が初めて故斎藤清吉さんと登山を共にしたのは昭和30年代後半で私が酒田山岳会に入会し、市民登山で鳥海山の万助口コースを登った時でした。それ以来万助小屋をベースにして冬季登山訓練や厳冬の鳥海山上ノ台コース初登攀（昭和40年2月）や翌年2月には矢島口と百宅口中間鳥海村袖川より布沢・竜巻池コースの登攀等に同行してご指導して頂き厳冬期登山を魅了してきました。

吹雪について小屋やテントの中に入ってお互いの無事を喜び合いながら酒を酌み交わし飲むほどに酔いがまわると特徴のある口調で登山に対する心構えや技術的なことなど、あるいわ巷の話題に花を咲かせ得意の清吉節で鳥海山お花畑の歌や山賊の歌を唄い座を盛り上げてくださいました。また先輩は山に登るとき、必ずと言ってよい位、愛用の尺八をザックの中に忍ばせて持ち歩き休憩時間やあるいわ小屋やテントに入って一休みした頃合いをみはかり尺八を奏でてくださいました。このように先輩の清吉さんは楽しみながら後輩の指導にも心を配り、一方では遭難対策や自然保護活動にも力を注ぎ続けてきました。

私達はよき先輩と恵まれた自然環境の中で山への愛着を持ち続けることができることに感謝すると共に、永遠の旅立ちをなされました故斎藤清吉さんに心からご冥福をお祈りします。

清吉翁と会長

梅津 博

清吉翁と会ったのは、正式には昭和28年夏の飯豊だと思う。正式とは、2年位前の冬に、鳥海の駒止小屋で見かけているからである。冬の飯豊も、私の目には全く変わらない清吉翁の服装だった。古い背広にズボンの裾を靴下で包んだ登山靴と尻皮に鉋、頭にはチロリアンではないよれよれのソフト帽子、この飯豊の国体予選から清吉翁との付き合いが始まる。酒田山岳会の事情で山の集まりに姿の見えなくなってきたことはあったが、翁というにふさわしく黒塗りの尺八を吹き鳴らす山の夜がなつかしく思い出される。

八年程前、山の集会で宮城県の花巻山で一緒になったことがあった。花巻山神社から山頂へ登っての帰り、清吉翁の様子がおかしく、本当に疲れたという感じで、ついには吐いて道端に横になってしまった事があった。その時には、珍しいこともあるものだと思ったりしていたが、今考えると、その頃から病魔は清吉翁の体へ忍び込んでいたのかも知れない。

清吉翁とは鳥海の清吉翁の小屋で一夜を楽しんだのが最後ではないが、もう一度あの小屋でイカの煮付けでも食いながら話を聴きたかった。酒を飲んでいる清吉翁が一番似合っていたと今でも思っている。去年の四月病院でお会いした時、『酒は飲んでいない』と事もなげに言われた清吉翁だったが、あれは本当の清吉翁ではない。

清吉翁の酒が動とすれば、私達には会長で通っていた後藤幹次先輩の酒は静といえるかも知れない。私はこの会長から、旅と旅する心を学んだ、とにかくいろいろのところまで、一緒に連れて行ってもらった。旅の空気や、風を絵にする姿が懐かしい。その時は、実に細かいタッチの絵で迫力のない描き方だと生意気にも批評したりしていたが、最近、三郎さんの好意で生前かきためられていた絵を見せてもらったが、意外や意外おらかな絵が多く驚いて見せていただいた。緻密

な計画でも、時には大胆な行動というのか、会長の処世訓だったのだろうか。

会長とは山岳連盟会長と山中山岳会長としての付き合いが殆どで、会長という地位が本当に絵になる方だったと想う。しかし、あるバカ共が会長を会長でないことにしてしまった時はガッカリした。会長の半分の人生はこの時終わったのかも知れないと今でも思っている。私達の不行き届きを嘆くほか無い。それでも最後まで山中山岳会の会長だったことは幸せで年に二・三回の集まりと小さな旅行は会長の楽しい日であって後輩の私達にも、会長と一緒にいられる最良の日であった

JAC山形支部の40周年記念蔵王の集いの時は、前支部長として、中途半端な私達を小さな事まで、よく指導して下さいました。そしてあんなに楽しみにしていたすぐ前に逝かれた事がなんとしても心残りな仕様が無い。

清吉翁と会長と一緒にいった秋田の仁賀保牧場から見た春の鳥海山は忘れられない美しさがあった。私は会長から画用紙をもらって筆ペンで鳥海山を感激のあまり書こうと思ったが、余りにも山が大きく手におえなかったことを覚えている。清吉翁がその時酒臭い息で私の絵を見ながら『やはり後藤さんの絵はうまい』と一言いわれた。その会長の絵が今、私の手元にある。仁賀保牧場公園より 79、5、20、23と書いてある。



ご冥福を祈る

前田直己

昨年 同窓の大先輩であり岳界の後藤幹次氏が逝去されたのは確か10月頃と記憶している。5年前他界した父が、山形に行くと常宿にしていたのが氏の経営する後藤又兵衛旅館であった。父と一緒に何度か投宿したことがあるが、往時は大学の先輩として面識を戴いただけであった。タイガー中島こと、日本長期信用銀行の中島寛氏から紹介していただいた氏の御息女である小倉董子さんと知り合い、是非一度、山のお話でもうかがうことのできるようお願いしていただけに、その機会を失ったことが残念でならない。

同時に斎藤清吉氏とは、御子息の斎藤幸彦氏が私の中学の一年先輩で日頃懇意にさせていただいておりますが先述の小倉董子さんが当社の財団で講演を頂いた席で氏の最後の著である清吉新道の本が贈呈されていた。私にも一冊いただいたので12月海外へ出張の折 熟読させて頂いた。郷土の山、鳥海山の総てを熟知した本人から直に話をお聞きしたいと思いながら帰国した日に氏の訃報に接したのである。

両先輩の 〃に接し得なかったことが、今日悔やまれてならない。両先輩の御冥福を祈るだけである。 合掌





有松清吉氏の思い出

川松久雄

酒田中興子に有松重蔵先生という
英語の教師が居た。山が好きで
暇があると山に入ると居たが、すく
と奥面目で殆んど授業中雑談等
したことがない先生だった。今から
五十年前か前の話である。その
先生が時向中英語の授業として
もしもで話をしたのが鳥海山に於
ける香山遭難の話である。パター
の一人が八合目あたりのクレパスの中
に滑落し救助する為のザイルが足
りない。二合目の登山者から金糸ザ
イルを取りに下りて上ってきたが
有松清吉さんであったという。

どの位時向がかったか忘れたが、
に偉大の峰を昇りて居た
来たそうだが持ちて来たザイルで
も足りず皆人そのザイルを
係も救助する事が出来たそう
晩年をとお付合頂いたが
清吉さんに対する思い出の甲斐
強く印象に残るのはあの山柄を
仰の甲斐に秘められたマニギツシを
仰力と飾らないトツととして語
りかける「川松君や」という声か
思ひ出す水てなつかしい
私は不幸にいそり界では色々
とお付合頂いたが山行に同道
したことがないか悔いしてゐる
中興子三年三月二十三日 記

清吉さんお世話になりました

後藤三郎

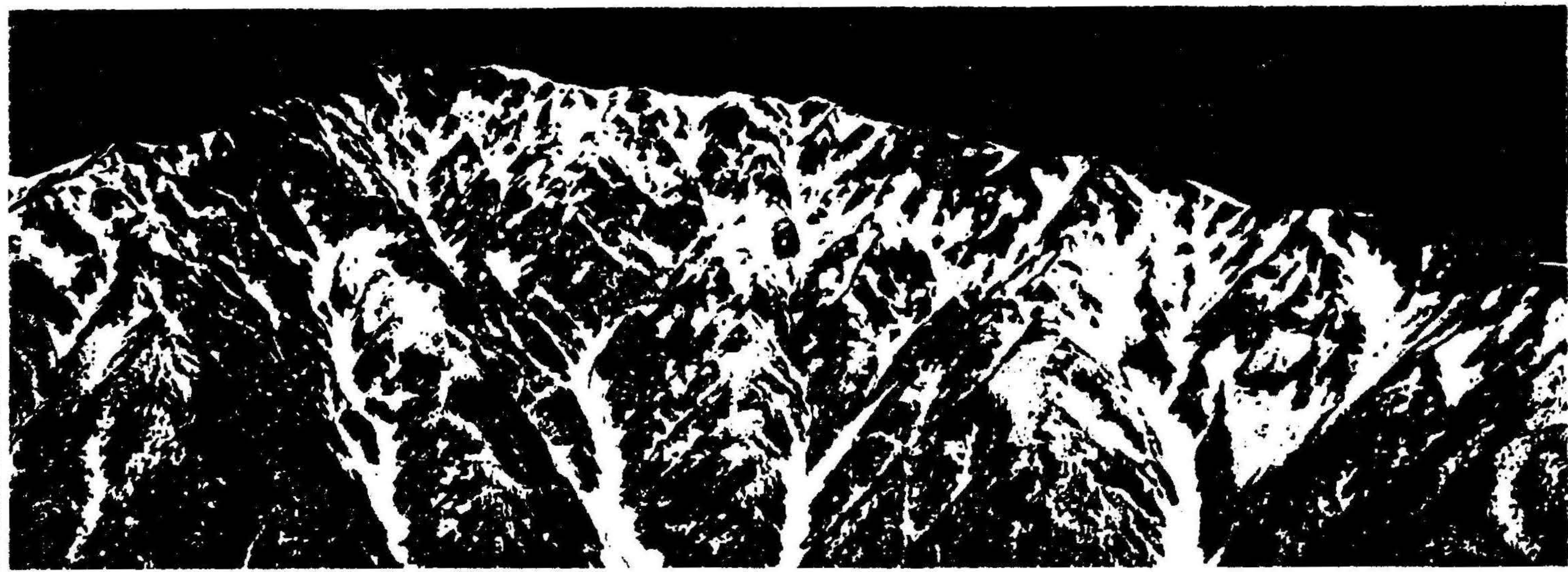
冬の鳥海山にご案内して頂いたとき鶏を一羽、白い羽根の付いたままリックにくくりつけて来られたのにびっくりしました。

そのときは湯の台を早朝暗いうちに出て新山に登り灯火目当てに湯の台に滑り降りました。その後 滝の小屋が出来てから春の彼岸荒れに一週間閉じ込められたときも杉沢の人を下げて鶏と酒を買いに二度も行かせました。

飯豊山の太日岳で霧の中で会ったときは前日一人で大倉尾根に登り水が無いので生キュウリをかじり、それもなくなり水筒に詰めてきた大事なお酒を飲みながら登ってこられたとか。JAC三県交歓会のおかげでした。

昭和23年 夏、清吉さんの困ったことは言葉が解らないことでした。おっしゃることの三分の一位しか理解できず ”ノー ノー”ばかりで、一言足りぬ言い回しも誤解のもと。

飯豊の帰り山都に下山、盆踊りの東山温泉で湯に浸かり、二人とも金がなくなりどうにか山形にたどりついた。山形まで来れば何とかなると…… うけとったのが誤り、その後 ”おまえは薄情だ”といわれる原因となった。しかし ”清吉さん、酒田までどうする?” 大丈夫ですか?” と聞かなかったことが薄情だったと深く反省してお詫びいたします



後藤氏の思い出

畠中六左エ門

昭和42年秋 埼玉国体山岳部門(奥秩父連山)に私が山形県の監督として出場するにあたり、当時の岳連の会長の後藤氏が私への激励の言葉として『奥秩父の山々は私の学生時代の思い出の山であり歴史面でも高山植物も多いところで、また変化のある山なので十分に味わってきてくれ』と言う事でした。思い出の言葉である。

斎藤氏の思い出

その一

厳冬期の鳥海山へ友人等と四人で登山、割合天候も良く山頂に立つことが出来、ローソクの火も立つ。そのうちに例の腰の水筒(戦争中のもの)をとり地酒を取り出し『今日の日 登頂を祝うて カンパイ』! ときたその数2,3杯、その帰りはあの葛石坂の大斜面を3,4回の回転で大平についたが、あのダイナミックな滑りかたとそのシュプールにはただただ驚き入るばかりである。

その二

鳥海山岳会では昭和35-45年頃まで毎年遭難訓練が行われ斎藤さんを講師として招かれておりました。訓練実施の前日、夕食前に装備の点検の中でサブザックの中身の御披露である。十余種の品々を畳一枚分に広げ、その利用法等を説明され、これくらいの準備があれば一週間は大丈夫? しかしウイスキーの小びんでは物足りないと結んでいた。私達はこの御披露を称して大宮の斎藤百貨店と呼んでいる。

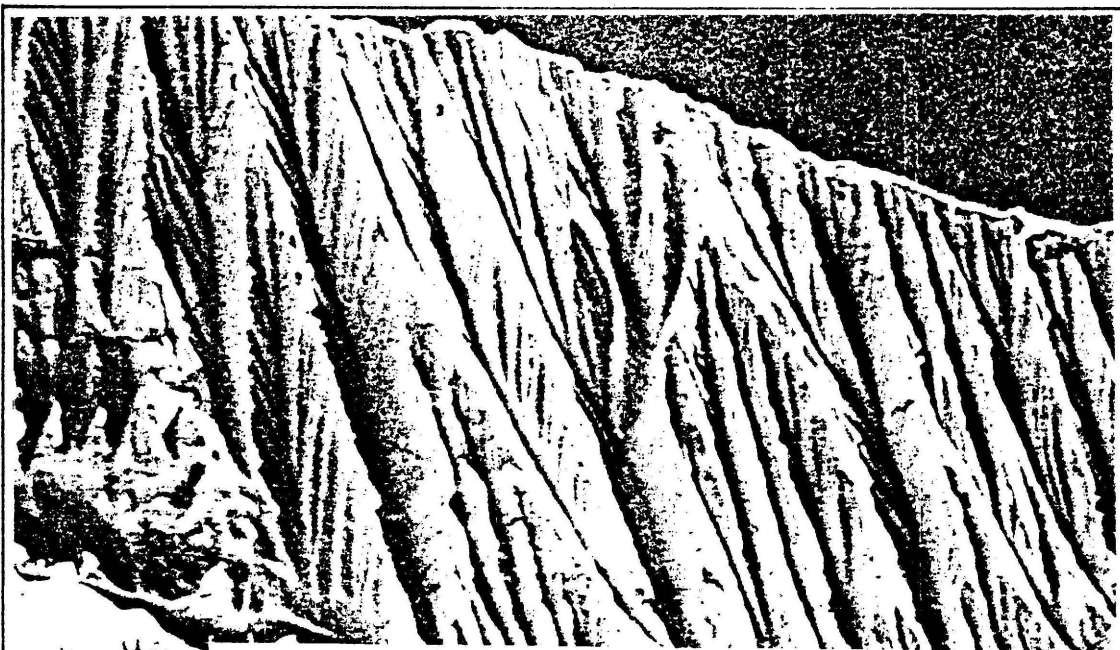


斎藤清吉さんの思い出

金森繁三郎

チロル帽にチョツキのオールドスタイルをいつも変えなかった、というよりむしろそれがすっかり身についていた清吉さんの姿が私達旧酒田山岳会員の目に焼きついている。誰からも『清吉さん』と親しみをこめた愛称で呼ばれ、育ちの良さが態度に出てしまうのか、いつもはおだやかで遠慮がちな口調で話すが、時として山行計画に不安要因があると素早く指摘して激 することもあった。旧藤島農校（現庄農）時代スキーの距離競技で鍛えた脚力は壮年をすぎても衰えずダブダブのヤッケで新雪の鳥海大斜面を低姿勢で大きなシュプールを描きながら、みるみるうちに小さくなっていった後姿を鮮やかに思い出す。実に豪快そのもののやまスキーであった。下りは”脱兎の如く”は冬山だけがスキーの場だった清吉さんの本領だったように思う。山も独力先行型だったので肉体的にはかなり無理を続け、晩年の予想外の衰えの遠因となったのではないだろうか。あまり上手とは思えなかった尺八の音色を清吉節と言う人もいたが、強烈な個性で貫いた登山スタイルそのものも正にまさに清吉節ではなかったかとおもえる。

昨年10月28日旧酒田山岳会OBの懇親会があり清吉さんは病 をおして出席されたのが最後の姿となってしまった。楽しみにしていながら都合で出席できなかったのが今だに悔やまれてならない。



忘れられない笑顔

今野秀穂

今から14年程前の1977年2月 秋田から山形に転勤になり、2・3年で帰る予定だったが山形の山に魅せられ山形の山を毎週のように歩いているうち瞬間に19年が過ぎようとしています。

山形の山を歩いて少したったころ山形の山仲間を紹介していただこうと思い日本山岳会山形支部長をしておられた後藤幹次さんを酒2升を持ってお願いに行ったことがあった、支部長は私の山歴など聞かれ現支部長の村上さんに推薦状を書いてくれたことがあった、そのお陰で私は良い山仲間を得、良い山行を続けられたと思っています。

私を日本山岳会に入会許可の推薦してくださったあの時の後藤支部長の柔和な笑顔が忘れられない。





58・8・28

対馬で後藤

・加藤両氏

FUJICOLOR HR 83



姥ヶ岳で憩う斎藤氏

後藤会長に寄せて

寒河江 誠

後藤会長に初めてお会いしたのは、昭和35年頃 山形県山岳連盟総会の席上であったと思います。私は、川西山の会の代表で出席しましたが、新参者であったにもかかわらず、色々と御教示をいただいたものでした。お名前は、私の学生時代、日本山岳会ルーム（お茶ノ水の木造平屋建）に出入りしており先輩や、資料などから、山形には早稲田OBの後藤幹次さんが活躍されているという、しかし、ご本人を知らずに山形県山岳連盟に加盟した次第であった。

その後、岳連事業に参加したり、高体連登山部の指導や、その連絡会議が県教育委員会の主催で開かれておりましたが、それらにも出席させていただくうちに、私の顔も覚えていただいた。

後藤会長と私は丁度親子の年令差であり（私の父と同じ年であった）、そのようなことからでしょうか、子供のように指導をいただき今も記憶に残るのは、確か、47インターハイのコース調査を何回か行っているときに、天元台ロッジで、贅肉のつき始めた私の体を見て『寒河江 靴を履くのが大変になったようだが、靴を楽に履くようでないとな体を壊すぞ』という忠告をいただいた、当時、私は健康そのものであると自信過剰であったが、年とともに次第に肉付きがよくなり、ついに、病気と闘わねばならない羽目になってしまった。

すっかり会長の忠告を忘れておりましたが、入院中にお見舞いいただいた折に、その言葉を思い出したが、もう、後の祭りであった。その後、お会いするたびに、私の調子を気遣って下さったようでした。後藤会長も、養生の甲斐あって、以前の体調に回復されたことをお聞きしておりましたが急な訃報に接して、何とも言えぬ淋しさで一杯であった。古き良き時代の話聞く機会を無くしてしまったことが残念でなりません。

”べにばな国体”も元気な姿を見せて頂き、全国各地から来県される山の後輩と交流をお願いし、後藤会長の指揮のもと実施された第7

回国体での鳥海山の思い出などを語ってくだされば、今度の国体の盛り上がりも大きなものであったものとおもいます。



昭和40年2月・
上の台コース。



七高山で斎藤、阿部両氏

『清吉スタイルのこと』

池田昭二

急速な科学技術の進歩に伴って、人々の生活様式から食生活、服装、果ては価値感に至るまで目まぐるしく変貌する社会風潮の中で”全く変わらないもの”を探すのは至難の業ですが、それが私達の身近あったのです。

”清吉さんの山行スタイル”です。あのヨレヨレの背広に、汗で煮しめたようなチロルハット。そして肌身離さなかった腰の鉈。鳥海山が国定公園になって木を伐れないのに、なぜ鉈を・・・と笑う人もいたが、彼の腰から鉈をとったら、もはやそれは清吉さんではあり得なかったのです。

清吉さんとの付き合いは40年に満たない若輩の私に、彼の真髓について語る資格はないのですが、彼が山に傾けたひたむきな情熱と一貫した登山理念は、その山行スタイルが端的に語ってくれているように思われます。周囲の罵詈雑言を風に流して、生涯独自のスタイルを守り通した清吉さんは、やはりスゴイ人物だったのでしょう。

幹ちゃんのこと・斉藤清吉さんのこと

清 水 弥 栄 治

斉藤清吉さんを初めて知ったのは、高校時代の県総体のときで、以来大会や積雪期講習会などで訥々と話される庄内弁をとくに聞きとりにくいと思いながら羨ましく楽しくお聞きしました。

30年余を経た今も庄内弁をそのおだやかな抑揚・やわらかいひびきから、もっとも美しい言葉のひとつと思うのも最初に悠揚迫らない斉藤清吉さんの庄内弁に出会ったからにほかならないと思っております。

後藤幹次さんご本人からはついぞ一度もきけなかったものの、雑巾がけの大切さを身をもつて^(まじ)いただいたと思っております。

後藤さんの声啗を得たのは、後藤さんが関係する各界それぞれの枢要な地位につかれてからで（もっともそれ以前に真夜中炊きだしのおにぎりをつくってもらったり迷惑はかけていましたが…）それまでの過程は知らないでいたものの、身近なOBが後藤さんについて、幹ちゃんについてあるごとに話してくれたことは、幹ちゃんがいかに長い間黙々と雑巾がけの仕事を丹念にやっていたかということでした。

そしてまた、立場上把握しておかなければならない事項や数字をおろそかにしなかったことや（ときとして、くどいとおもったことも2度3度…）、「同業は仲良くしなければならない。それぞれ得意の分野があってお客様をもっているのだから、協調できるはずだしまとまらなければならない」といったことをきくにつけ、見識の高さに敬服したものです。

胃の術後はともかくそれまでは遠くを厭わず出かけた「そば好き」が、自分は小さな握り飯なりと食べないとそばだけでは落ち着かないから本物のそば好きとはいえないという謙虚さや、美しいものを心から楽しめる素養、趣味的の高さ、そして頑固さがないまぜになった、なんとも魅力のある人物像。

今はただ、斉藤清吉さんともども心からご冥福をお祈りします。

連呼とバラと

菊地俊彦



『後藤幹次をよろしく願いしまあーす』

砂漠のバラ

メガホンを口に当て、声を限りに連呼し続けた。

旅館組合・観光協会・山仲間がバックアップしての市会議員選挙への
立候補であった。

その時、高校生で山岳部に所属していた私は先輩から言われた、

『幹ちゃん、おがすぐなったら、おらだの顔、丸潰れだべ、おま
えだも応援さ、こらんなねべした』

山形では先輩の言葉の最後に（先輩の顔）と（なねべした）が付い
たら命令形になる。

我々が行かなければ国家存亡の危機・大変なことになる、お家の為、
国のためと悲壮感を一身に背負い部員一同おっ取り刀で駆けつけた。
応援と一緒に駆けつけたのは、大学生になったばかりのM氏と私と同
級のK氏であった。M氏は登山に関して私に最も強い影響を与えた方
で、蔵王山頂で空を仰ぎながら、

『見でみろお 雲は流れて行くべ、どごさえぐんだが、考えでみ
ろ』

私に哲学的な思索と青春の生き方を教えてくれた大切な人であり、
その哲学的な一言で今も尊敬する先輩の一人である。

この偉大な先輩が『後藤屋の幹ちゃんと言えは泣く子も黙るんだぞ』
と強迫じみたことを言い、事実、彼は後藤会長の前では正座を崩した

ことがない。

後で知ったことだが正座の目的は他にあったのかもしれない。

ア そういえば後藤会長には山好きの年頃の娘さんがいたっけ！

もう一人、一緒に連呼した仲間のK氏は驚くべき記憶力の持ち主で、山形から上野までの駅名を全部暗唱できるだけでも尊敬に値するのに、本人も行ったこともないフランスはパリ・ガル・ラファイエット通りにある88デパートの正面玄関を右に見て西に50メートル、『郵便局があったべ』という人物である。

私が飴玉に欣喜雀躍のころ、焼酎に目を細め、腹をたたいて『ウワッハハハ』と笑い飛ばす豪傑だった。このスケールの大きな高校生も後藤会長の前では平身低頭、模範高校生であった。

当時、選挙本部が栄玉堂で、私が頂いたのは胡麻塩のおにぎり2個であった。それにひきかえK氏は、両手をだしたので、おにぎり4個と漬け物、上には上があるものでM氏はなんと、おにぎり4個と漬け物の他に酒と日当を拝受した。私はここでも、いかに生くべきかを学習した。

そのような青春を織り交ぜながら後藤会長は見事、第2位で市議に当選した。昭和26年のことである。

後藤会長は知識欲が旺盛で、お会いする機会があると何か一つ必ず質問があった。私の専門が鉱床地質学ということを知っておられ、それに関するものが多かった。あるとき

『菊地くん、これどうして出来るんだ？』

と言いながら大事に示されたのが、掌中の珠ならぬ掌中の（砂漠のバラ）であった。私は学生時代の鉱物実習で実物をみて知っていたが、市井の旅館のご主人が砂漠のバラを持っているだけで不思議なのに、成因にまで興味を持たれていることに驚き、いくつになっても何にでも興味を持つ人柄に感動した。この（砂漠のバラ）は娘さんが”女子走破隊・サハラ・東欧2万キロ”の旅で、永久に枯れることのない文

字通り、サハラに咲いたバラを父親へのみやげとして求めたものであった。この砂漠に咲いた鉱物結晶のバラを通していつも嫁いだ娘さんを思い出しておられたのかもしれない。

いづれにしても青年の感動をいつまでも持ちつづけた後藤会長だった。後藤又兵衛旅館には、娘が親を、親が娘を想う砂漠に咲いたバラがある。

そして、私には後藤会長という思い出のバラがある。

私は40年ぶりに声を大にして在天の岳兄諸氏に声を限りに再び連呼しようと思う、

『後藤幹次会長をよろしくおねがいしまあーす！』

平成2年度事業

1 支部総会

期日・5月13日

場所・西川町

参加人数・20

2 支部40周年記念講演会

6月9・10日

鶴岡・第1コミュ・センター

65

3 JAC全国支部山形集會事前調査

9月8・9日

蔵王

15

4 JAC全国支部懇談会山形集會

10月13・14日

蔵王

157

5 晚餐会

12月8・9日

朝日村

13

6 樹氷観賞山行

3月9・10日

蔵王

11



第3号は会員各位のご要望により後藤幹次・高橋清吉両氏の追悼号といたしました。原稿をお寄せ下さった会員各位へ厚くお礼申し上げます。春山の好機到来、装備に万全を期して春山を満喫されますようお祈りしております。